川上　高司　ブログ　アーカイヴ

2015年

8月20日

中東の安定の鍵を握る小国オマーン

アメリカとイランがイランの核問題で合意に達し、両国の外交路線が宥和に転換したのは多くの外交上の努力の積み重ねがあったのはもちろんだが、中でも湾岸諸国のオマーンが果たした役割は大きかった。外交が途絶えていたアメリカとイランの対話の仲介をしたのがオマーンの国王だった。そこから交渉が始まったのである。

湾岸諸国でありながらスンニ派国家であるサウジアラビアとは一線を画し、シーア派のイランとは友好関係を維持している。中東を二分するような宗派闘争には関心がないオマーンは 8 月 6 日シリアのモアレム外相を招待し､アラウイ外相と会談した。このシリア外相のオマーン訪問は、2011 年にシリアで内戦が始まって以来初めてのことである。2 人はシリア内戦を終結させるために協力していくことで一致したという。

オマーンはイランとエジプト、サウジアラビアとイランとの対話の仲介もした実績がある。最近ではアメリカとイエメンのホーシ派との停戦交渉の仲介も果たした。

そんなオマーンの外交の基本方針は、シーア派イランとスンニ派サウジアラビアとの橋渡しになることであるという。そもそもオマーンはイランを他のスンニ派諸国ほど「脅威」だと見ていない。むしろイランとの関係を悪化させることは中東の平和にとってはマイナスにしかならないと見ている。

シリア問題はアサド大統領の進退をめぐって退陣を要求するアメリカやサウジアラビアと、存続を支持するイランやロシアが真っ向から対峙している。さらにＩＳＩＳ問題が絡み合って複雑で難しい問題となっている。

イランとアメリカも数年前までは一触即発の危機にあった。シリア問題も外交交渉を根気よく重ねていけば、平和的に解決する可能性がないわけではない。オマーンはその困難な道に、中東の安定のために「平和の仲介者」として踏み出したのである。小国ならではの外交力に期待したい。

8月22日

人道的危機に陥っているイエメン

1 年前、イエメンでシーア派であるホーシが立ち上がったのはハディ政権に改革を求めるという平和的なものだった。その当時は彼らは政権を奪取するつもりはなかった。だが、30 年間独裁政治を敷いたサレハ元大統領が権力の奪取をしたいという野望からサレハ派がホーシ派と結びついて力を増し、ついにはハディ大統領を追放して革命政権を打ち立ててしまった。

元々ホーシ派はイエメンの北部を基盤としていたが、勢いを得てスンニ派勢力が

強い南部へと進出しスンニ派との軋轢を生み出してしまっている。ホーシ派はイランの支援を受けていると言われており、サウジアラビアをはじめとする湾岸諸国がホーシ派の勢力拡大を黙ってみているはずがなかった。

とうとう 2015 年 3 月にサウジアラビアが主導するアラブ諸国がアメリカの支援を受けてイエメンのホーシ派への空爆を開始したが、ホーシ派とスンニ派、さらに権力の奪取を目論むサレハ派の抗争は激化している。やっかいなのはいずれもがイエメンという国家の政治的安定や民主化には関心がないことである。

ひたすら権力抗争にあけくれる傍らで特に紛争のあおりを受けているのがこどもたちだ。3 月の空爆開始以来、ＵＮＩＣＥＦによれば 400 人近くのこどもが空爆で殺害され、377 人が少年兵となって戦闘の前線に連れて行かれたという。負傷したこどもたちはさらに多いことはいうまでもない。さらに深刻なのは、サウジアラビア率いるアラブ諸国の厳しい経済封鎖で医療品さえも手に入らないということだ。ただでさえアラブ諸国の中でも貧困国で医療が滞っていたイエメンの医療水準は壊滅的だ。

イエメンの半分近くのこどもたちが食糧不足から栄養失調に苦しみ 5 才以下の乳幼児の死亡率はじりじりと上昇しつつある。こどもたちの精神状態はさらに悪い。空爆や家族を亡くしたショックはトラウマとなってこどもたちの心に暗い影を落とす。そのケアをすることもできないためその影響は将来に渡って続くとなれば、イエメン社会が被った損失は計り知れない。

国連はこのような状況を「もはや戦争犯罪に近い」と、その危機的状況を訴えている。シリアやイラクへの国際社会の関心は高いがイエメンのこの人道的危機には国際社会の関心が薄い。国際社会の関心こそがイエメンの子どもたちの危機を救うまさにひとすじの糸なのである。